

2023 09

完成しない映画

7月14日、パリ祭の日に誕生した姪っ子の奈緒ちゃんが50歳に成った...。障がいを持って生まれ、長くは生きないだろう、と言われた奈緒ちゃんの記録を撮り続けて41年目の夏...。撮影された膨大な映像の編集に取りかかりながら、撮り始めた頃のことを仕切りに思い浮かべる。

最初の構想は、五分間ぐらいのホームムービー。元気な奈緒ちゃんの姿を映像に遺したい...という素朴な発想だった。それにしては、私以外のスタッフは皆プロ中のプロ、と言っていいような、ベテラン揃いだったけど。スタッフの中心的存在のカメラマン 瀬川順一さんは親父の親友、戦前・戦中・戦後を映画人として生き抜いてきた大先輩だ。話し好きの瀬川さんとは『奈緒ちゃん』の映画を巡って、実にイロイロなことを語り合った。駆け出しのカントクだった私にとっては、“ドキュメンタリーの学校”のような作品創りだったと、今は思う。

作品完成のイメージを、
「障がい者の映画というより、家族の映画だな...」
「藤沢周平の時代小説のようなトーンにしたい...」
さらに瀬川さんも私もクリスチャンでもないのに、
「聖母マリアの物語なのかもしれない...」
という話もした。

出来上がりのイメージを語り合った極め付けは、
「完成しない映画にしよう。スペインの建築家ガウディのサグラダファミリア（聖家族教会）の建築のように...」だ。

瀬川さんやスタッフと大切にしていたことは、「ただただ奈緒ちゃんとその家族の日々を撮り続けよう、それも特別ではなく“普通の日々”を...」だった。

多くのドキュメンタリーは特別なことをフレームアップしてメッセージしたがるけど、むしろ“普通の日々”にこそ、生きることの本質はあるに違いないのだから。普通のことを素直に撮り続けよう、と通い続け、「完成しない映画」「完成しないドキュメンタリー」こそを目指そうと、本気で語り合った...お酒のイキオイも多少あったかもしれないが。

「完成しない映画」を目指したドキュメンタリーは、12年間を記録し、瀬川さんが末期がんの告知を受けて、奈緒ちゃんが成人式を迎えた冬に、完成してしまった...。映画は『奈緒ちゃん』と名付けられた。

けれども“完成しない映画”の精神は、そのまま私の中に生き続けたように思う。その後、奈緒ちゃんの映画は『ぴぐれっと』『ありがとう』『やさしくなめに』と撮り続けられ、41年目の今なお撮影は続き、次回作『大好き』が来春まとまる予定だ。元気な奈緒ちゃんの姿を遺そうと始まったドキュメンタリーは、奈緒ちゃんが元気である限り完成しない「いのち」の記録だ。撮り続けた映画には、一体何が写ったのだろう...

40年程前、撮影を始めた頃に、瀬川さんが試写室で撮影されたラッシュを観ながら、つぶやいた一言が忘れられない。「“しあわせ”が写ってるよ...そう思わないか？」

“しあわせ”って何だろう？
次回作『大好き』にも、その答えは写っていないかもしれないが、その問いかけは繰り返されているように思う。
奈緒ちゃんの映画は41年経って、まだまだ完成していないんだ、と思いつく頃だ。

本当に、“しあわせ”って何だろう？

伊勢 真一

カ
ン
ト
ク
の
つ
ぶ
や
き

二〇二三年九月